
イレギュラーが行く！～リリカルなのは【MASVF】～

キョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレギュラーが行く！〜リリカルなのは【MASVF】〜

【Nコード】

N2343U

【作者名】

キヨン

【あらすじ】

転生オリ主モノ。

オリジナルキャラクター（敵味方全て）のスペックは滅茶苦茶高いです。

第1話 始動

つまんないなあ。

小雨降る中、銀髪に淡いスカイブルーの瞳の少年は呟く。

年齢は9歳くらいといったところだろうか。

だが、纏う雰囲気だけは決してそれではない。

虚ろな目で鉛色の暗い天を見上げ「アハハ」と不気味に笑う。

よく見れば、彼の全身は真っ赤な“何か”で汚れていた。

それは何か…、

血だ。

フラフラとした危なっかしい歩みで、少年は歩く。

彼のいる場所はどこかわからない公園。

ただ一つ、わかるとすれば。

——ここが、とある世界のどこかにある公園である

ということだけだ。

視界の遠くに、巨大な津波が押し寄せて来ているのが見える。

「…ピアス・ラース。セットアップ」

『Sir』

右腕のガントレットから無機質な機械音が響いた後、白銀の光を放つ。次の瞬間、そこに姿を変えた少年がいた。

白銀の端がボロボロのローブを纏い、右手には少年以上の長さがあるランスを持っていた。そのランスの真ん中あたりには透明の水晶体が。

『Br - a k - - M , o d - 』

『M - e o r - S p - - r . S , t - n d b - - R e a d - ? 』

ガゴゴゴゴゴゴゴツッ!!!!

雑音の混じった音声を発し、少年の持つランスが回転を始め、それを包むように白銀の魔方阵が展開。ランスに何やら光る文字も浮き始め、神々しい輝きも増す。

「メテオ・スピアー」

少年はランスを高々と天に向かって突き上げた。刹那、白銀の光が天を貫いた。

「ツツ!？」

時の庭園が小規模次元震によって大きく傾いた。

黒髪の女性――プレシア・テストロッサは立ち上がる。

これほどの次元震。ロストログアの反応すら無い。ならば、何故？
否、結果は明らかだ。

――誰かが起こしたモノであることはすぐに理解出来た。

『時の庭園』の外側を見れば、次元空間の壁を白銀の光が貫いているではないか。

その光が次第に細くなり、最後には消える。

暫くすると、そこから一人の白銀のローブを羽織った少年が飛び出し来た。その姿は弱々しく、全身血塗れだった。

「……あれは……、！」

同じく、『時の庭園』。その一角で金髪の少女も同じような光景を目の当たりにしていた。

穴から飛び出した少年は不安定な状態で浮遊し、最終的には『時の庭園』の。その少女の前に落ちた。

急いで少年へと駆け寄って体を抱き起こす。

真つ赤な血が大量に付着していたが、よく見ればそれは誰かの返り血。見たところ大怪我は負つてないようだ。少女はホツと息を吐いた。

「う、グウ……」

少年が苦しそうに呻く。

おかしい。怪我はしていないのに……。

刹那、少年の白銀のローブが消えてその左腕が顕になった。

「!？」

何故《左腕》なのか。それは、見るからにおかしかったのだ。

血管が破裂するのでは言うぐらいに膨れ上がり、腕中に紫色が広がりつつあった。そして、今度は左目から血が溢れだした。

「う あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ
あ あ あ ツツツ! ! ! ! ! ! !」

少女の腕の中で少年が苦痛の声を上げる。

「っ、しっ
かりして！」

少女は声を掛けることしか出来なかった。

自分には、治癒魔法なんてモノは使えない。ただ力があるだけじゃ、何も出来ないのだ。

気付けば、少女は「頑張れ」と少年を応援して抱き締めていた。

何故だろう？

そんな自問自答する思考も放棄して。少女は願った。

ビキビキと。少女の耳でもわかるぐらいの音を立てて左腕が悲鳴を上げる。それは、気持ち悪いぐらいにまで膨張していた。

そうして何分が過ぎたのだろうか。

いや、案外1分も経っていなかったのかもしれない。

少年の容態が、漸く収まったのだ。

「ふう……」

少女は安堵の息を吐く。このまま収まらなかったらどうしようかと思っていたところだ。大事に至らなかったただけ良かったのかもしれない。だが、少女はそれ以前に少年が助かったことに安心していた。

今、彼は腕の中で静かに寝息を立てている。

何か大きなことを遣り遂げたような。安心したように眠る姿。そ

れを見て少女は微笑んだ。

「……良かった……」

何故こんなにも、暖かい気持ちになれるんだろう？
だけど、

「…本当に……、良かった……」

今はそんなこと、どうでもよかった。

少年が横たわる台座の近く。玉座に腰を落としたプレシアは空中
ディスプレイに目を通していた。
その内容は少年の情報だ。

彼はどうにもかなり特殊だ。

魔力ランク：SSS++

稀少能力：絶対貫通。

上記二つがプレシアの目を引いた。

特にその異常な魔力ランク。今までに沢山の魔導士を見てきたが、

SSS++はいくらなんでも信じ難かった。

ランクオーバーなのは明らか。先程起こった次元震を起こしたのが彼であれば、確かに頷ける。

しかし、それに耐えられるだけのデバイスもデバイスで異常だ。

見たところ、少年のデバイスは右腕にある透明の水晶体がはめ込まれた白銀のガントレットのよう。観察してみるものの、他のデバイスとの違いは不明のままだった。

「……ふうん。面白い子ね」

それだけの言葉で片付けられることなどではない。が、今はそうとしか言えなかった。

——数日後。

「……う、……ん……」

少年が閉じていた目蓋をゆっくり開けて目を覚ました。

「あ、起きた？」

その近くで座って様子を見ていた少女が嬉しそうに言い、少年の顔を覗き込んだ。心なしか、その表情は明るい。

「……ここ、は…？」

「高次元空間内にある『時の庭園』。母さんの家」

少年の問いに答えると、彼は「そっか……」と言った。

「……無事、出れたんだ」

「出れたって？」

「あの『世界』を。あの『世界』は滅びが決まった『世界』だった。元々その『世界』は外界を拒絶する。内部から外界に出るのも全てそこを、俺は無理矢理突破してきた」

淡々と語る口調。そこには幾分かの悲しみが聞き取れた。

「……一体なにがあったの？」

「……。ただ、滅びが決まった『世界』が滅びの時を迎えただけだから」

理不尽。

少女にはそうしか思えなかった。

少年曰く、『世界』はもう壊れたらしい。もう戻ることは不可能なのだ。

「……自己紹介、まだだね。わたし、フェイト・テストロッサ」
「トキ。トキ・ロートリアス」

「トキね。よろしく」

ニツコリと笑う少女——フェイト。それを見たトキは少し目を見開いて驚いた素振りを見せた。

初めて、優しく声をかけてくれた。

「ど、どうしたのっ?」

気付けば、目から涙が溢れていた。

わからない。

でも、嬉しかった。

「……ありがとう……」

[illegible]

かつて、トキはあの『世界』で魔導師だった。最初はなんてことはない普通の魔導師だった。

友達は、
いない。

作りたくなかった。

それ以前に、作れなかった。

いじめを受けていたのだ。

しかし、あの瞬間。

彼は変わった。

——否、変えてしまった。

家族は、元気な姉が一人。父母は既に他界していた。

彼女は何も知らない、普通の少女だった。

ある日。彼女が魔法を知った。

そして、消えた。

何があったかはトキ自身知らない。

2012年12月31日『世界滅亡の日』

その夜、彼女は現れた。

そして彼女が異常なものすぐにわかった。

何故かはわからない。彼女は何者かによって支配されていた。
攻撃され、反撃せざるを得なかった。

そして――、

――彼女を殺した。

大好きだった。

いつも背を追いかけていた姉を。

――汝、力を欲するか？

トキは悔やんだ。何故姉を闇の手から守れなかったのか。

――汝、我を欲するか？

力が、欲しい。

守りたいものを守るだけの、

――汝、絶対を欲するか？

絶対的な力が……！

分岐点を過ぎ、彼はその力を手にした。

報復を。

大好きな姉を支配した闇に、絶対的な復讐を。

その時、この12月31日が『世界滅亡の日』となった。

[illegible]

「……ここを出ていく」

唐突に言い出したトキの言葉を聞き、フェイトは動揺した。

「『世界』を滅ぼした俺がいたら、迷惑どころかただの邪魔者だ」

フェイトが制止するが、それを拒むようにトキは立ち上がる。

「待ちなさい」

が、その声を聞いてピタリと動きを止めた。
声の主は、プレシアだ。

「私は貴方に少し手伝ってもらいたいことがあるの。消えるのであれば、それからにして」

手伝うこと？ と首を傾げるが、プレシアは何も言わずにフェイトを持っていた杖で指した。

『フェイトに聞け』ということなんだろう。

「期待してるわ」

拒否権は無いと言わんばかりにプレシアは踵を返して奥に消えた。
トキがフェイトを見ると、彼女は複雑な表情をしているのだった。

だるい。

少年はただそう呟いた。

何故、こんなことをしなければならないのか。

俺の必要があるのか。

人員はいくらでもある筈だ。

わざわざ回りくどいやり方をせずとも、充分な対応は可能だった筈なのだ。

なのに、何故？

「……ま、今考えずとも、いずれ答えは出てくる。今は――」

——高町なのはとの接触が優先だ。

[illegible]

さて、少年が何故高町なのはへの接触が重要なのか。事を追って説明しよう。

少年——紅波あかなみ 神威かむいは転生者である。

神上という者に会ったが、訳は全く聞き出せなかった。

『この力を授けます。後は流れに身を任せてください。そうすればいずれわかります』

神上はそれだけを伝え、彼を飛ばした。

圧倒的な力を得、彼は再び世界に降り立った。

1	1	1
2	1	1
3	1	1
4		1
5		1
6		1
7		1
8		1
9		1
10		1
11		1
12		1
13		1
14		1
15		1
16		1
17		1
18		1
19		1
20		1
21		1
22		1
23		1
24		1
25		1
26		1
27		1
28		1
29		1
30		1
31		1
32		1
33		1
34		1
35		1
36		1
37		1
38		1
39		1
40		1
41		1
42		1
43		1
44		1
45		1
46		1
47		1
48		1
49		1
50		1
51		1
52		1
53		1
54		1
55		1
56		1
57		1
58		1
59		1
60		1
61		1
62		1
63		1
64		1
65		1
66		1
67		1
68		1
69		1
70		1
71		1
72		1
73		1
74		1
75		1
76		1
77		1
78		1
79		1
80		1
81		1
82		1
83		1
84		1
85		1
86		1
87		1
88		1
89		1
90		1
91		1
92		1
93		1
94		1
95		1
96		1
97		1
98		1
99		1
100		1

「……で、この時期に飛ばした、ってか？」

時間帯は夜と言ったところ。

不気味なくらいに静かだ。せめて、虫や蛙の鳴き声が聞こえてくればもう少しマシなのかもしれない。

「……なーるほど。初めて魔法少女になった日に来たつつうワケだ。そんじゃ、ユーノもフェレットで頑張り始めたところか」

大変なこつて、と神威は息を吐く。偉く他人事な感じが否めない。

「……まあ俺も大変になるんだろうなあ……」

そんなことをグチグチ呟きつつ、動物病院の方へと足を向ける。

何故だか道がわかるのでそれを頼りにゆったり進む。恐らく、神上あたりが何かしら備えてくれたに違いないだろう。

「……む、魔力反応。デカいな……、多分なのはだよな」

近づくにつれ、鮮明な魔力反応が神威の感覚を刺激する。もうセツトアップは完了した頃合いだろうか？

「ふう……取り敢えず、軽く見ときますか。出来るなら関係持たせときたいし」

念の為急ごうか、と脚に力を込め、神威は颯爽と駆け出した。

一方で。

「嘘……、な、何なのコレ……？」

いきなり服が白い物に変わり、少女——高町なのはは絶賛混乱中であつた。

「来るよ！」

「えッ——、きゃあ！」

『Protection』

ガン！

ジュエルシードの発動によって現れた“何か”がレイジングハートのバリアに衝突。反動で押し返され、不気味な目でなのはを睨む。

「ガアアアアッ！」

“何か”は雄叫びを上げて再び突っ込んで来た。

「ッ！」

バリアを展開。辛うじて防ぐが、そこからは防戦一方。重々しい音が響き、バリアが揺れる。

「っ、このままじゃ……」

ジリ貧だ。

どうにかして次の一手を。

しかし、そう簡単に策は浮かばない。

攻撃するにはバリアの展開を解除しなければならぬが、それはそれで“何か”の攻撃は防げないし、戦闘未経験兼運動苦手なのはには避ける自信は皆無である。

(ど、どうしよう……)

回らない頭をなんとか回転させるが、如何せんなのはがこんな展開で出来る最良の選択肢を考え付く筈もなく……。

「フンッ！」

結局、一瞬で駆け寄って来た少年に握られた棍メイよって“何か”は吹き飛んだのだった。

「……………あれ？」

「おう、大丈夫か？」

少年は身長の上三倍以上はある棍メイを軽々肩に担いでなのはへと向き直った。

「俺、紅波神威。アンタは？」

「ふえ……………？ ……あ、わたしは…、高町なのは、って言うの。平仮名で、なのは」

「ん、ご丁寧にどーも」

一つ頷き、なのはを見ながら少年——神威が左手を翳す。
ガァン！ と。展開されたバリアに“何か”がぶつかり、衝撃の

反射によって大きく跳ね返された。

「んで、フェレットもどき」

「フェレットじゃない！ ユーノ・スクライアだよ！」

「ああ。わーったわーった。それじゃあユーノ。取り敢えず“アレ”は俺が弱らせるから、なのはトドメと封印させる」

「ちよつ、なんでそれを——ッ!？」

「——説明は後だ」

ユーノの言葉を遮るように言い放ち、視線を“何か”に向き直して翳していた左手を振るった。刹那、バリアが弾け、競り合っていた“何か”はまたしても地面を転がった。そしていつの間にか。

——神威の左手にはゴウゴウと燃え盛る炎剣が確かに握られていた。

本能的にか。危険を察知したように“何か”は後退り、神威をキツく睨む。

「トドメは俺じゃないんでね。安心しろ——つっても無理な話だよな」

ブワツ、と“何か”が触手のような物を伸ばし、神威を攻撃するが、それは左手の炎剣によってあつという間に焼失。意味を成さずに塵となる。

——と。

いきなり神威の姿が霞み、気付けば“何か”の目と鼻の先に。咄嗟の判断で後退しようとするが、棍を横から叩きつけられ、堀

に激突する。

たった一撃叩きつけられただけ。それだけなのに、“何か”は既に動くのもやつとの状態にまで追い詰められていた。

「ケツ、呆気ない終わり方だなジュエルシード。聞いて呆れる」

やれやれ、と首を横に振りなのは元へと歩きだす。その際にきちんと拘束魔法であるバインドをつけるのをわすれない。

「さ、封印してくれ」

「えッ、あ、うん…」

『Sealing』

しどろもどろに返事を返しながらもなのはジュエルシードを無事封印。

特に傷を負った訳でもなく、特筆すべきは謎の少年が現れただけだろう。

神威Side

「あの、カムイ君、君って……」

「予想している通り……、とは少々異なるな」

えっ、と不思議そうに首を傾げるのはとユーノに説明をする。

ここは、先程の場所の近くにある公園。まああの場所にいたら色々大変な事態になることなんざ目に見えていた訳だし。

「魔力を使うが、俺は魔法のみを使うワケじゃあない」

人差し指を立ててクルクル円を描く。

「序でに言うておくが、俺はこの世界……少なくとも、『地球』の住人ではない」

まあ序でつてことで。

これ以上の追求は華麗に回避しちゃうか。

「じゃあ、俺は消える。また会いにくるからそん時ゆっくり、な。積もる話はまた」

S i d e o u t

ヒラヒラと手を振り、背を向けて闇に消えていく神威を、二人は黙って見つめていた。

「……何だろう、あの人……」

肩に乗ったユーノはただ彼の中を考えていた。が、何も見えない。

[illegible][illegible]

でも、意外と複雑でした。

気付けば……あれだ。よくテンプレで出てくる真つ白な景色に包まれた場所にいた。それに、寒い。……いや、ゲレンデじゃないってば。あと冬でもない。

「私はリーシャ。神上さんの下で働く女神様だよ」

うん、いきなりわからん。

「なんか、大変だったみたいなのよねえ……。天使長さんも忙しいし、最近は黒……。黒なんとか、って人も転生させちゃって……。刀海だけじゃ対処無理みたいなんだよねえ……。」

うぬぬ、と腕を組み唸るリーシャとやはらは何やら重要そうなことをつらつら呟く。

とゆーか僕にスツゴく聞こえるんだよねえ……。

「あのー……。それ喋っちゃってよろしい内容なのかな？」

「うえ！？ ナシナシ！ 今のは聞かなかったことにして！ スルーしてもらつとスツゴく有難いんだけど！」

なんでそこまで慌てるかね……。

話に出された黒なんとかさんと刀海さんはお気の毒に。まさか神様達に關係してしまうとは。

「……ところでなんだけどさ。僕をここに呼んだのは何故？」

「あ、そうそう！ そう言えばそうだったね！」

忘れちゃダメでしょうが。

「転生しちゃって！」

「はいはい了解……。ってオイ！」

「ノリツツコミいただきましたあゝ！」

……。なんかペース乱されるなあ……。

「でね、取り敢えず巷で有名なチートにしてあげるから……なんだけ？ 確か、『なのは』の世界で頑張れ！ って神上さん言ってたよ」

うん。じゃあ頂戴。

「はい」

と言って手渡されたのは透明な手一杯の水晶球。なんだろう、生き物にある鼓動に近いのが感じられる。

「その中に能力が詰まってるから、現実に戻ったら一緒になってあげてね」

うむ……。

釈然としないけど……、まあいいや。

「《PSYREN》と《ぬら孫》の力を入れといたからね。存分に使ってあげて。それと、使用したら《魔力》使うからね。と言っても《SS+》だから無くなることは滅多にないと思うよ？」

ふうん。

『なのは』に転成、ね……。しかも《SS+》とは。そんじょそこらの魔導師とは差がありすぎな気がするけど……。

「向こうに行ったら9歳になってるから。あとイレギュラーが二人くらいいるから、仲良くやってね？」

「い、イレギュラー？」

「そ。物語の媒体に埋め込まれたイレギュラー。そして、あなたと同じ境遇のイレギュラー」

「それってつまり…、『なのは』の世界にいる元はいない人物と転生者ってこと？」

「そーだね。簡単に解釈してもらえばそうなるよ」

外見に比べて随分とイレギュラーな発言をする娘だな。

「む、失礼なことを思わなかった？」

滅相もございません。

「そんじゃ、早速行ってもらうよ」

リーシャがサツと手を振り、その軌道から光の粒子が溢れだした。

《PSYREN》。そして《ぬらりひよんの孫》の能力。

結局、なんでそれを預けられたかは不明のままだ。

ま、何かしらの理由があるのは確か。

……どうなるもんだらうねえ……。

……それと、なんか聞き忘れた気がしないでも無いなあ……。

「じゃ、行つてらっしゃーい！」

……ああ！

「ちょっと待って！ 現実の僕は——！？」

どうなったの！？ と言いつけて僕の視界は白からブラックアウト

トした。

……まあ、死んだんだろうねえ。結局。
参ったなあ……。

| |

「……あり？」

そして、視界がクリアになる。
場所は、図書館。
つてことはつまりあれなワケだね。

「八神はやてとの接触……」

……ま、ボチボチやりますか！

…………とまあどこぞの主人公ヨロシク！　と意気込んだワケだ
けど……。

「あ、いたいた」

暫く図書館内を搜すと、お馴染みの光景が見れた。
車椅子に座りながら後少しで届かない本に手を伸ばす少女。

ま、助けよつか。

接触してほしいのは望みなんだろうし。

「ほいほい」

「えっ……」

「これでしょ？　取りたがってた本」

「あ、ありがとうございます……」

「どうってことないよ。困っている人がいたら、助けないとね」

特に、主要人物たる君には、ね。

「ああ、いきなりごめんね。僕、琴芝ことしば 零夏れいか。よろしくね」

「あ、うん。私、八神はやて。平仮名ではやて、なんやけど……変
よね……」

「全然、立派で可愛い名前じゃん。八神ちゃんにはぴったりだよ」

「そ、そう……？」

「大丈夫。自信持ちなよ」

ありがとな、と照れたように顔を赤くして笑う。僕もつられて頬

の筋肉が緩んだ。

「レイ君は、この辺りに住んでるん？」

「レイ、君……？」

「？ …… ああ、ごめん。 零夏、やからレイ君。 あだ名よ」

「成る程。 まあ確かに呼びづらいもんね」

「別にそういう訳じゃ……」

「あはは。 大丈夫。 ありがとね、八神ちゃん」

うつ、と気まずそうに目を伏せる。

…… 僕の名前の所為だよね、コレ。

「あ、そういえば、なんだっけ？」

急遽、話題を変えて重苦しい空気を脱出。

「うん。 レイ君はこの辺りに住んでるのかなあ、って聞いたんや」

「あゝ、それが……」

不思議そうに首を傾げる八神ちゃんの前で思考を展開する。

実際、ここには家も何もない。 つい数分前にいるんな意味で来たばかりだから。

「…… はっきり言うよ。 僕に家が無いんだ」

うーん……。 これだとはやての生活状況分り切ってるからなんだが泊めてくれて依頼してるみたいで嫌だなあ……。

「家が無いって…… どういう状況なん!？」

まあこれはこれで話せないんだよねえ。

完全に失敗^{しくじ}った。何か理由でも考えておけば余裕でこの状況を打破出来たのに！

「ハア……野宿かなあ……」

気付いたら、口から呟きが漏れていた。

「……だったらレイ君、家来ない？」

「……ハイ？」

「丁度一人暮らしやし部屋もある。野宿じゃなくて家に来たらどうや？」

有り難き幸せ！

僕には八神はやて様が女神に見えるよ！

「……ってレイ君、何を拝んどるん？」

「……ハッ、つい衝動的に……」。

「あー…えっと。お世話になっても大丈夫、なのかな？」

「うん。ウチから誘っているんや。別に断ってもええねんけど……、いいやダメや！ レイ君は野宿したらアカン！ 家に来ることが決定事項や！」

「……その根拠はどこに？」

「ともかく、本を取ってくれたお礼や！ 異論は認めんで」

「……偉く不釣り合い過ぎないかい？」

……あ、そうだ。

「本音は？」

「レイ君いると何か面白そうだからや！」

おおふ。そんなカミングアウトでありましたか。

「……………あ……………」

力説している内にさらっと口を滑らせたのに気付いた様子。顔を赤くして俯いてしまった。

……一瞬可愛いと思った僕は間違っていない！……………筈だ、多分。

「……そこまで言うなら、お言葉に甘えさせてもらおうかな？」

「ホンマか!？」

「うん。ただし条件。僕は必ず八神ちゃんのお手伝いをすること。これなら良いよ」

「えー。別にお手伝いなんかせえへんでも……………」

「お世話になるんだから、恩は返さなきゃでしょ？　じゃなきゃお誘いは断らせてもらうけど」

「うう……………、わかった……………」

折れてくれたようだ。

客人なんだから、これぐらいしないとね。

「ただし、私からも条件や！」

その内容、如何なるものか？

「私の言うことを聞くこと！ 拒否権はナシや！」
「ん、了解」

この時僕は二つ返事で了承してしまっていた。そりゃ人様の家だから言う事にはきちんと従わないとだからね。

でも、これがいけなかった。

まだまだ先の話になるけど…、まさかあんなことになるなんて…
……………。

主人公設定

1

姓名『トキ・ロートリアス』

年齢『9歳』

魔力ランク『SSS++』

魔力色『白銀』

魔法陣『カルト式』（円内に五芒星が描かれている）

稀少能力『絶対貫通』『指定した対象物（1つに限る）を必ず貫く』

デバイス

『ピアス・ラース』

「白と灰色の光沢の大型ランス。インテリジェントデバイスで、コアは透明。

それ自体が非常に異常な程頑丈で武器として使用可能。

刀身だけで4m越え。刀身を回転させることにより、貫通力を飛躍的に上げられる。

モデルはモンハン3のランス『マテンロウ』から」

『

』（後に登場予定）

技名

『メテオ・スピアー』

第一話で登場した自身絶対最強の技。稀少能力『絶対貫通』の代名詞とも言える。限りなく伸びる魔力光線は全てを貫く。

『メテオ・ストリーム』

第二話から登場。ピアス・ラースから槍を模した魔力弾を撃ち出す。数に限りなく、半永久追尾弾を射出させる。

『スターブースト・ノット』

地上専用技。回転させたピラス・ラースを地面に突き立て、ハリケーンを生み出す。その場から動くことは出来ないが、かなり広範囲を巻き込むことが可能で、範囲を指定できる。

『ジ・アナザーストーム』

ピラス・ラースを高速回転させ、自ら滅茶苦茶に動き回る。制御はほぼ不可能。空気抵抗が少ない程速く動けるようになるので、空中戦で高ければ高いほど有利になりやすい。地上でやると地面に突っ込んだりするので自重している。攻撃速度は自身最高。

『――』

『――』（後に公開）

備考

『白銀の髪に赤い瞳。少し切れ目。いつも物静かな立ち振舞いをしており、とても冷静沈着な人。最初にフェイトと出会い、助けてくれた（と思っている）礼に協力関係にある。元いた姉の他に初めて優しく接してくれたフェイトのことを誰よりも大切にしている。その為フェイトの言うことは忠実に必ず守る。自分を受け入れてくれる人には優しいが、それ以外の人には冷たい。普段は話題を持ち合わせていないので口を開くことは少ない。可愛いもの（猫や子犬）が好き。（まだ公開できません）という状態』

好きな

〔食べ物〕ハンバーガー

〔事〕気力集中・精神統一、戦闘シュミレーション

〔物〕ナシ

嫌いな

〔食べ物〕苦い物

〔事〕一人の時間を邪魔されること

〔物〕虫全般

姓名『あかなみ紅波かむい神威』

年齢『9歳』

魔力ランク『SS-』

魔力色『紫』

魔法陣『ミッド式』――『』

稀少能力(?)『とある魔術』

「転生によって神より授かった『インデックス禁書目録』の中に
ある全ての魔術を使用できる。

ただし、使うと魔力を消費する」

デバイス

『――』『――』(後に登場)

備考

『黒短髪。左目が黒。右目だけが蒼のオッドアイ。魔法や魔術を使う時だけ右目は紫に変色する。意外にも気さくな少年。一人称「俺」。
飄々とした態度をとるのでイマイチ性格を掴みづらい』

好きな

「食べ物」色々

「事」あまり体を動かさないこと

「物」特に無い

嫌いな

〔食べ物〕無い
〔事〕頻繁に体を動かすこと（スポーツなど）
〔物〕特に無い

3

姓名『^{ことしは}琴芝 ^{れいか}零夏』
年齢『9歳』
魔力ランク『SS+』
魔力色『深緑』
魔法陣『ミッド式』『（追加するかも）』
稀少能力（？）『《PSYREN》の力と《ぬらりひよんの孫》の
畏の力』
「上記二つの作品の技全てが使用可能に。魔力を消
費する」

デバイス

『———』『———』（後に登場）

備考

『一人称が珍しく「僕」という心優しい少年。黒髪黒眼で少し細い
と感じる体型。神威と同じ転生者。面倒見が良く、周りから気に入
られやすい』

好きな

〔食べ物〕美味しければ何でも

〔事〕静かにのんびりすること、読書

〔物〕特に無い

嫌いな

〔食べ物〕美味しく感じられないもの全般

〔事〕特に無い

〔物〕特に無い

第2話 動きだす者達

「手伝いつて？」

「ロストロギア。一般呼称ではジュエルシードを十五個以上收拾してくること」

「ロストロギア、ね……」

それを使って何をしようと言うのだろうか。プレシアに聞かなければわからない。でも、知る気はない。トキにとって、知る必要は無いのだと思う。

「場所は何？」

「地球。日本国内の海鳴という所。行けばわかるわ」

「ん、わかった」

結局、トキもロストロギア回収に参加を決定。いわば、助けくれたフェイトへのせめてものお礼だ。

彼女自身何もしてはいないのだがトキがどうしてもということで行くことに。プレシアに強制されたということもちょっぴりあるが今は置いておく。

聞くのは仕事が一段落してからでも遅くはない筈だ。

「そろそろ。行きましょう」

「了解」

『OK・Masters friend』

天気は良好。いわゆる晴天の青空というやつだ。

『なのはー。まだかー？』

「んー、ごめーん！ もうちょっと……」

部屋で髪を纏め鞆を持ち、忘れ物が無いか確認する。

彼女、高町なのはは魔法少女である。

本当に偶然と偶然が交わった奇跡によって成り立ったものではないが、まあなつてしまったのだ。

「ハンカチよし、ケータイよし……。レイジングハートも一緒、と」

胸元に光る赤いビー玉のような物。

『レイジングハート』と呼ばれる魔法補助器具——一般呼称では『デバイス』——だ。

元々はユーノ・スクライアという少年の物ではあるが、今は彼女、なのはが持っている。

「お待たせー！」

タッタッタ、と軽い足取りで階段を降り、リビングに入る。

そこではソファーに座るのはの姉、高町美由紀がフェレットを抱えて愛でていた。

近くには彼女らの兄である高町恭也もいた。

今日はなのはが月村家よりお誘いを受け、恭也はその保護責任を兼ねてついでに月村家でのんびり過ごす予定だ。あくまでついである。大事なことから二回言った。というか暇なんだな大学生。

「じゃあ行こうか。バスの時間、ギリギリだぞ」
「うん！」

余程楽しみだったのだろうか。満面の笑みで頷くのはを見て、恭也も美由紀も笑った。

「いってきまゝす！」

肩にフェレット、ユーノを乗せ、二人は意気揚々と歩き始めるのだった。

「……探知」
サーチャー

トキが呟くと、ランスから無数の魔力の線が伸び、海鳴市全体へと広まる。

『サーチャー 探知』というのはそのまんま、指定した物を探す魔法だ。魔力

量が多い程それに比例して探査範囲も拡大する、トキにとって中々使い勝手が良い魔法になっている。

「……大体の場所はわかった。ただ、かなり曖昧になっている」

ロストログアを見つけたようだ。曰く、ある中心点から半径500m以内には必ずあるらしい。

『ロストログア』。一般呼称『ジュエルシード』は発動すればそれがある場所はすぐに特定が可能だが、だからこそ、未発動の時はかなり見つけづらくなっている。

「行こう。母さんが待ってる」

「了解」

まず最初にトキがビルを飛び降り、フェイトがそれを追いかけるようにして飛び出した。

「どうするよ。なのはもこねえし。気付いてんのは俺だけかねえ」

それもそれで面倒だな、と神威は呟く。

原作で言えば、月村宅敷地内でジュエルシードが発動するという

事態。

彼の場合、なのはとは別行動が多いのでまだ互いの場所は知らない（ただ、神威のみはなのはの場所を一方的に知っていたりする）

「さて、俺だけでもちよつくらやるかねえ……。……搜魔の弦」

左手に黒いボウガンのような物が現れ、ひとりでに弦が引かれて何も無い状態で放たれた。

「……んま、そんな簡単に見つかるよーなヤツじゃねえよな」

これは主に目的のモノを見つける為の魔術に過ぎない。今は物でも探すことは可能な筈だ。

「……………」

目を瞑り、目蓋の裏に映し出される景色に目を凝らす。
すずかやアリサと談笑するのは。それから、

「……フェイト……。ともう一人、誰だ？」

原作にはいない筈の、一人の少年がフェイトと共にネコを構っていた。

恐らく、その人物こそが、『「物語」という媒体に組み込まれた《イレギュラー》』。確かに、何もかもが異常だ。

神上曰く、ああやって物語に創られた人を直接組み込む行為は普段はご法度である。が、今回は特別。話せない理由はある。

「……まあいい。アイツらとは後でどうなろうと接触がおこるワケ

だしな」

とにかく、今はジュエルシード探索が優先だ。
この物語が原作と同じになるとは肯定出来ない。イレギュラーが
存在する時点でもうそれはわかるであろうことだ。

「……急ぐか」

神威は更に意識を集中させ、探索を急いだ。

着いた先は、豪邸の庭。どこかの金持ち屋敷の敷地内にロストロ
ギアの反応がある。が、発動していない今、詳しい場所を読み取
るのは不可能だ。

さて、

「……ね」……」

現在進行形でトキは今ネコとじやれている。
何故こんなにたくさんいるのかは不明だが、可愛いのに変わり
はない。

抱いたり撫でたりし、トキの頬も少し緩んでいた。

それを見てフェイトもホツと胸を撫で下ろした。

彼と出会ったあの日から、トキは兎に角元氣というか覇氣というか。それらしきものが全く感じられなかった。崩壊した『世界』に心残りがあつたのかもしれないが、フェイトは敢えて言わなかった。『世界』の事を口走って、トキが更に傷付きかねないからだ。

—— イイイ……。

「「!!」」

不意に、二人が顔を上げる。ロストロギア——ジュエルシードの少し強めの反応だ。

「……発動は時間の問題だな」

子猫を降ろし、一撫でしてから安全な場所へと移す。

心配そうにか細い鳴き声を上げるが、トキは構わずに踵を返した。その背は、「大丈夫」と語っていた。

はつきり言って、あまり危険性は無いものだろうとトキは踏んでいる。

結局、世界を崩壊させたトキにとって、このぐらいは朝飯前に過ぎないのだ。

フェイトと互いに顔を見合せ頷いた後、二人は飛んだ。

「……あー……」

なのはとフレットのユーノが呆れたように“何か”を見ていた。

それは、巨大化した猫。どうやらジュエルシードは彼が発動させたらしく、『大きくなりたい』という願いは普通に叶えられたようである。

「……でも、このままじゃ危険だ。きちんとジュエルシードは封印しないと」

「そ、そうだね。流石にあのサイズだとずずかちゃんも困っちゃうだろうし……」

今はそんな問題ではないだろうとツツコミを入れておく。そもそもあんな巨大な猫を見て平気な奴はまずいない筈だ。

「……取り敢えず、封印しちゃおうか。レイジング——ツ!？」

丁度その時。なのはの目の前に何者かがかなりの勢いで着地。ドゴン! という音をたて、砂埃を舞い上げた。

「な、何……!？」

腕を顔の前で交差させ、その隙間から目の前の惨状をみる。

その中心点には一人の少年。白銀のローブを纏い、右手には身長を超えるランスを軽々と構えていた。

少年——トキはなのはを横目で一瞥し、子猫へと突貫。
それを追うようにして、更に背後から黄色の魔弾が飛来。少年を
通り越して子猫に命中する。

驚いたなのはユーノと共に振り向く。

視線の先、金髪で黒い衣装に身を包んだ少女——フェイトを見つ
けた。

「な、魔導師！？ それも二人……！？」

突然の出来事にユーノが声を上げる。

普通、ここに魔導師はなのはを除いて存在しない筈なのだ。

「ッ、レイジングハート！ お願い！」

『Standby・Ready・Set up』

咄嗟の判断でなのははレイジングハートを起動。すぐに子猫の下
へと飛び、雷撃をシールドで以て防ぐ。少年も攻撃の手を止めて後
退した。

「……だ、誰……？」

なのはは一人困惑。

ユーノが影に身を潜めてフェイトやトキを観察していた。

（……あの金髪の子、間違いない。僕と同じ世界の住人。……そして
これは……ジュエルシードの正体を……）

では、あの少年は？

（……ッ！！ 何、あの魔力量は！？ なのはや、それにあの金髪の子も圧倒的に超えているなんて……！）

非常に厄介だ。

「……同系の魔導師、……ロストログアの探索者か」

「それと見て間違いはないだろう。魔導師でこの辺りをうろつくのであれば、同目的となる」

トキがピラス・ラースを構え、フェイトに賛同の意を示す。

『Scythe form・Set up』

フェイトも同様、バルディッシュを構えた。

「ロストログア——ジュエルシード。……申し訳ないけど、いただいて行きます」

「ッ！」

開戦の合図。

フェイトが飛び出し、なのはへと突貫した。

『Evasion・Fler Fin』

レイジングハートが反応し、なのはは真上へと飛び上がり、鎌状になったバルディッシュを避ける。

そのまま一気に上昇。距離を開けた。

が、

「なのは、危ない！」

「え？——きゃあッ！」

『Protection』

ガアアンッ！

逃げ切れたと油断していたなのはに、トキの鋭い突きが襲う。
咄嗟にバリアを張って防ぐものの、強すぎる勢いに押され、なのはは吹き飛んだ。

「う……く……」

「なのは、来るよ！」

『Arc Saver』

『Meteo Stream』

『Protection』

フェイトからは鎌の回転刃。トキからは無数の魔弾がランスの先から射出され、なのはへと飛来する。

——オオオオオッ！

「なのは！」

バリアに攻撃が当たり、小爆発を何度も繰り返した。

「大丈夫！」

煙の中からはが飛び出す、刹那、

「ッ！」

フェイトが上段からバルディッシュを振り下ろし、それをなのが受けとめる。

「……なんで、いきなり……こんな……」

「——余所見は魔導士にとって命取りだ」

腹にランスが回され、なのはが地面に叩き落とされた。トキが引っ掛けて無理矢理落としたのだ。衝撃をなんとか緩和し、地に足を着く。

「……完全に、格が違い過ぎる」

特に、少年——トキはなのはと圧倒的な差があった。フェイトはそれでも充分に闘える。

しかし、トキを相手取るとなるとかなり変わってくる。圧倒的な魔力量と経験の差が有りすぎたのだ。

『Shooting mode』

レイジングハートをシューティングモードへ移行。デイベインバスターの発射準備を開始する。

「なのは！ わりい、遅れた！」

と、そこへ一人の少年が。

「カムイ君！」

カムイと呼ばれた少年は左手のボウガンを構えると同時、右手に^{メイ}棍を持つて肩に担いだ。

「まだ大丈夫だよな？」

「うん！」

元気よく頷くのはを見て、「そりゃ結構」と少年——神威は不敵に笑った。

「その銀色！」

神威が叫ぶと、トキが不思議そうな表情で視線をそちらへと向けた。

「ちよいと、やろうか！」

『聖人』の力を使い、一瞬で接近して^{メイ}棍を振り下ろす。
ガギン！と。重い音が響き、トキのピラス・ラースと神威の^{メイ}棍がぶつかった。

「へえ。『聖人』の力に対抗するたあ、やるじゃねえか」

笑いながら、空いた左手のボウガンをトキに向ける。

「断魔の弦」

ビビュウッ！ という高い風を切る音と同時に強力な不可視の刃

がトキの顔面を襲う。間一髪、トキは首を捻ってそれを紙一重で躲し、ピラス・ラースで棍^{メイ}を弾いてから神威の脇腹に叩きつけた。

「——ゼロにする！」

が、それは神威に触れただけで威力を失い、止められた。

「何ッ!？」

「ラアッ！」

ブオンッ！ という低い音と同時に棍^{メイ}があり得ない速度でトキへ迫る。

なんとかピラス・ラースを引き寄せてガードするが、不安定な体勢と神威の圧倒的な力の差でトキは後ろに吹き飛ばされた。

「トキっ！」

時間にして僅か5秒。一瞬の攻防戦でトキが押されていたのを見てフェイトは驚いていた。急ぎ、トキの元へと駆ける。

『Meteor stream』

地面を滑りながら勢いを殺したトキ。すぐさまピラス・ラースを回転させ、なのはに狙いを定めた。

「フェイト、ジュエルシードへ！」

ドドドドドドドド——！！！！！！

連続して魔力の槍が射出され、油断していたなのはに向かって放たれた。

「!？」

「ッ、なのは！」

「クソッ！」

ユーノが叫び、神威が動き出すがもう遅い。何本もの槍がなのはを襲い、大きく吹き飛ばした。

フェイトは隙を見てすぐさまバルディッシュを使ってジュエルシードを封印。バルディッシュ内に取り込み、空中に飛んでトキの元へと行った。眼下では気絶したのを起こす神威と、こちらを見るユーノ。

「……行こうか。ここで時間を潰す必要はない」

「うん、そうだね」

彼らに背を向け、二人は飛翔した。

[illegible]

零夏Side

「……終わったかな？」

「？ 何がや？」

「いや、なんでも。こっちの話だよ」

「そっか。なら突っ込まんとかわ」

「そうしてもらえると有難いね」

まあまだ魔法が発動する時じゃあない。

早く闇の書が起動してほしいところだよ。

結局、かなり原作と変わっちゃった訳だけど。

後一、二ヶ月ぐらいだね。

闇の書の起動は六月。それまでにやらなきゃいけないことがある。

「……大変になるなあ……」

僕ははやてに聞えないように小さく呟き、手元の本の表紙を捲るのだった。

第3話 前日。戦闘。接触。

神威 Side

月村邸での一悶着は俺が適当にごまかしたので何とか治まった。

そして今日はその日からしばらく経ったある日。

「温泉？」

「うん！ 今度家族やお友達と一緒に行くことになったの。それで神威君も誘えないかなあ、って思ってた」

季節は未だ春。と言っても桜の花は散り、少しずつだが葉桜となつてきている。

「そう言われても……俺がいきなり行ったらおかしくないか？」
「大丈夫なの！ 私がこれから皆に言うから！」

いやこれからって……。

某アから始まってンで終わるサイトのお急ぎ便も真っ青だろつに……。

「さ、行こ行こ！」

そして俺に拒否権は無いらしい。

……しゃーなしだ。付き合ってやろつ。

……ふむ。

ひしひしと感じる殺気は気の所為じゃないらしい。
現在、俺は高町家にお邪魔し、なのはが無理なお願いをしている。
いくら何でも通るとは思えんね。どこの誰かわからん奴が……、
且つ、シスコン野郎が二人もいたら尚更だ。

なのはが家族と話をしている間。俺は目を閉じてあることをしていた。
いた。

まあそれは後々話すとしてだ。

「君……、神威君だったか。道場に来てくれ」

と、高町シスコン兄……高町恭也に促されて俺は道場へと来ていた。
た。

「……君は、なのはの友達なんだな（お前がうちのなのはを取ったんだな）」

……副音声で誤解を招いているらしい。

はつきり言おう。

俺はアンタに誤解を招くようなことはしていない。
俺はアンタに誤解を招くようなことはしていない。

大事なことから二回言ったぞ？

「……少し、（肉体言語的に）話をしようか？」

……嗚呼、俺はどうすれば良いのだろうか……？

S i d e o u t

| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

恭也が短木刀二本。神威が長木刀を一本を構えて互いに向き合う。
逆手と正眼に構える恭也と違い、神威は片手のみで木刀を持っていた。その切っ先は地面に落とすように着けられ、とても真面目な構えとは言えない。

（やり合うのは初めて。いくらチートでも気を抜くはタブー。慣れない俺に取って長期戦は不利と見た）

脳内でシュミレーションを行い、自分に最も最適な流れを捉える。

「——ッッッ！！！！」

合図はない。

ただ、目の前に落ちてきた目視不可能な埃が地に着いたと同時に動き出したのだ。

恭也の左の突き。身体を左にずらして紙一重で躲し、神威が右手で袈裟斬り。しかし、それは右手の小太刀に防がれる。

互いに地面を蹴って後退。距離を開け、刹那にまた激突する。

一瞬の攻防。二、三撃しては退き、再び斬り合う。二、三撃斬り合い、退く。その繰り返し。

（あれ以上斬り合えば、体勢が崩れるのは必須！）

（そこに一撃を入れられれば終わり！）

（いくら相手が子供でも、この速さに喰らい付くのは異常！）

（油断する。その瞬間、）

（（敗北！！））

ガガガッ、と三撃。木刀が鈍い音を立てながらぶつかると。

二人の考えは全く同じ。少しでも気を抜けば、敗北が決する。であるならば。決して下手に手出しは出来ない。

「フッ！」

神威Side

結局、許可は取れたらしい。

余談だがなのは「フッフ……お兄ちゃん、後でOHANA
SIなの……」と言っていたのは気の所為だろう。うん、気の所
為に違いない。

さて、それはいつ行くのだろうか？

「明日」

「急だなオイ！」

というのがあったのがついさっき。

因みに明日の朝高町家に行けば良いらしい。
それまでに準備を終えなきゃならない。

……そうだ。

携帯を取り出し、電話帳内を見る。

01 神

あれ、これだけ？

まあいいや。

トウル、ガチャ

『どうされました？』

早ッ！？

『いえいえ。ワンコール出が神の決まりですから』

「何ソレ！？ つーか心読まんてよ！」

『良いじゃないですか。減るものでもないでしょう？』

……………orz

「……………まあいいや。ところでさ、ベツレヘムの星創って良い？」

『また唐突なお願いですね。天使でも召喚する気ですか？』

「いんや？ ただの住居にする」

『構いませんよ。……………と言わなくとも創ってしまうんでしょうし』

「よくわかるな。その通りだ」

しかし……………、と神上が言葉を濁らせる。

『本当に創れますか？ あの全長は40kmを優位に超えます。創るのには数年単位も必要ですし、航空機の航路の関係もあります。その辺りを確認しないことには……………』

「ああ、そんなことか。問題はない。簡単なことだ。邪魔にならな

零夏 Side

不意に、第六感が疼く。

正確には、全感覚といった方が良いのかもしれない。

簡潔に言おう。

——超巨大な魔力反応がこの地球の傍で感じられた。

魔力が収束され、そこに細かい小さな魔力が更に集まりだす。

時期的に言えば、ジュエルシードが関係するのかもしれないと思っただけ……。多分、不正解。

リーシャ曰く、他にイレギュラーが二人もいるのだ。粗方その所為だろうと思う。

「——レイ君——レイ君！」

「のわッ!? ……っと、ゴメン。どうしたの?」

「むう……。レイ君さっきからボーッとし過ぎてウチの話ちっとも聞いてくれんやんか!」

「ああ……。ごめん、考え事っていうか何て言うか……」

モコモコと口籠もってしまう。

まあ迂闊に喋れる内容じゃないし。

そんなジト目で睨まなくても……。

「……………はやてを見て思わず可愛いと感じたのは仕方ない。そう、仕方ないんだ！（↑半ばヤケになりかけている）」

「……………レイ君、何か隠してるちゃうん？」

「ギクツΣ（□、；）」

「……………その焦りよう、やっぱり何かあるんやな？」
「ギクツギクツΣ（□、；）（□、；）！！！」

何故バレかけてるし！？

……………ハッ！

さてはお主、エスパー！？

「ちやう！ 美少女や！」

「心読むなし！」

しかもさり気なく美少女だとカミングアウト！？
こ奴、中々にやりおる……………！！

1 + 1 〳 は！？

「“田”！」

「なん……………だと……………」

絶賛力オスタイムw（↑天の声）

『まずはその、』

「『ふざけた幻想をぶち殺す!』」
「完璧!」

……。 (↑絶賛落ち込み中)

……一体何故あんなことになったのか。激しく疑問に思う。

…いや、元はエスパーなはやてが悪いんだ!

結局、カオスな雰囲気を自力で脱出。
今は風を浴びる為に散歩中だ。

序でにさっきの魔力反応の確認をしておきたいしね。

あの魔力は今でも収束が続いている。感じる魔力は膨大で恐らく海鳴市よりはデカい……。んだけど、魔力反応の距離や肉眼で確認出来ない辺り宇宙空間にある物じゃないかと推測出来る。

テレキネシス
念動力をフル稼働させて身体を浮かし、一息に何百mと飛翔する。

気温は低くなるが、強化のライズで充分に防げるし、いざとなれば太陽光を集めて暖も取れる。宇宙空間という気体の無い空間に出るけど、酸素は原子レベルで持って来ているし道^{バス}も繋げてあるから準備は万端。

あつという間に雲を突き抜け、眼下に日本や太平洋、ユーラシア大陸を臨む。

初めての景色に思わず吐息が漏れる。

本当に、綺麗だ……。

「……ん……？」

と、暫く地球を眺めていたら、遠くの地平線から物体が高速で飛来してきていた。

それは僕のすぐ近くを通り過ぎて――、

――近くの超巨大な物の一部となった。

「……………はあ？」

それ以外に言葉が見つからない。

歪なカタチをした、超巨大空中要塞都市。

見覚えがある。

『ベツレヘムの星』

ミカエル
神の如き者の世界の救済をする為の計画の一部。

全長は40kmを超え、自己修復機能を持ち合わせた要塞だ。
その巨大さ故に内部には移動手段が整えられている。

四方に広がるカタチは天使長の周りに鎮座するモノを表す。

天使でも召喚する気？

正気の沙汰とは思えないね。

「まあ、調査価値は大いにある」

ベツレヘムの星に着地し、辺りを観察する。

音の無い宇宙空間な訳だから、はた目から見れば無人の廃れた街だ。

「こんなモノを創って……何する気だ……？」

軽く、近くの壁に触れてみる。感じるのは魔力の循環。

この星を構成するのはたった一人の魔力によるもの。相当の魔導師……いや、この際は“魔術師”か。

原作にこんなヒトはいなかった。

つまり、導き出される解答は一つ。

これは、イレギュラーの仕業である。

「……驚いたか？ もう一人の、イレギュラー転生者？」

！？

S i d e o u t

神威Side

ベツレヘムの星は完成。

後は一度中に入って見回り。

いやはやしかし、あつという間だった。

半日もかからなかったし、と言つか二時間経ったか経たなかったかぐらいだ。

上出来上出来。鼻が高いぜ。きっと某俺様キャラも真っ青だ。

ベツレヘムの星内に生命反応が一つ。

誰が、なんて考える必要もない。

ここに単身でこれるのは、イレギュラー以外いまい。

出来たてホヤホヤ（別に湯気は出てない）のベツレヘムの星へと
転移。丁度、転生者の後ろだった。

「……驚いたか？ もう一人の、イレギュラー転生者？」

驚いた表情で振り向く少年。

咄嗟に構えた。

「俺の家に何か用か？」

「家って……、こんなの既に要塞じゃないか」

呆れながらも構えは崩さず、隙も見せない。

「お前も転生者なんだろ？ 俺、紅波神威。構えなくとも攻撃なんかしないさ。腕も閉まってやるから」

そう言えばまだ神の如き者の右腕を出したままだったんだ。
まあ念じれば消せるんだし、今は出さないでおく。

「……琴芝零夏」

レイカ、ね。

っーか細いな。

「知ってると思うが、俺は“魔導師”であり“魔術師”だ」
「僕はまあ、“超能力”と“畏の力”を使う者、かな？」

一回やってみる？ とレイカが言う。

確かにやってみるのも面白い。対戦相手には持って来いだ。

「付いて来い。闘技場に案内してやる」

S i d e o u t

広々とした空間に、似付かわしくない二人の少年が対峙する。

ここは、ベツレヘムの星。その中の、超巨大闘技場。コロッセオをまんま巨大化させたようなモノで、幅は2kmにも達する。ただの真つ平らな闘技場だけではなく、様々な機能も付いているが、今は触れないで置く。

「……始めるか」
「ん、了解」

二人の目の前に、カウントダウンを示す三つのランプが点灯。
そして、

[illegible]

3カウントの後、ブザーが鳴り響き、二人が同時にアクションを起こした。

神威が地面にどぶん、と手を突っ込み棍ミスを取り出す。

それと同時に零夏も消えた。

「明鏡止水……」

相手の認識から外れる。

そこにいるのに、そこにいない。

「……いきなり厄介過ぎんだろ……」

構えたまま、辺りに視線を彷徨わす。

何もない。

何もない。

何もない。

少年。

何もない。

何もない。

何もない。

「!？」

目を見開き、咄嗟に棍^{メイ}を横に構えた。

刹那、

——ガギンッ！

^{メイ}棍に刀がぶつかった。

「お？ よく気付いたね？」

「ハッ、ギリギリだけだな」

^{メイ}棍を振り抜き、零夏を押し返す。

^{メイ}その際、武器を棍から七天七刀にすり替える。

^{アルス・マゲナ}

（黄金鍊金も使いたいが、準備も何も終えてない。このまま続けるか……）

抜刀の構えを取り、一瞬で最大の一閃を放つ。が、読まれていたのだろう。刀で捌かれ、あっという間に距離を取られる。

ならば、と再び神威が抜刀の構え。そして、刀を抜く。刹那に七本のワイヤーが零夏を斬り刻んだ——、

——筈だった。

斬られた瞬間、零夏のカタチが崩れた。手応えは無い。つまり、

——フォン！

神威はその場で跳躍。横に振るわれた刀を躲す。

「甘いね」

「お互い様だ」

今のは、鏡花水月。もう一つの、畏の力だ。

中々に決定打を与えられないまま、打ち合いが続く。

「チツ……ルーン」

神威の表情が面倒そうに歪む。決まらぬ勝敗にイライラが募ったのだ。

「一世界を構築する五大元素の一つ、（M T W O T F
F T O）

一偉大なる始まりの炎よ（I I G O I I O F）

一それは生命を育む恵みの光にして、（I I B O
L）

一邪悪を罰する裁きの光なり（A I I A O E）

一それは穏やかな幸福を満たすと同時、（I I I M H）

一冷たき闇を滅する凍える不幸なり（A I I B O D）

一その名は炎、（I I N F）

一その役は剣（I I M S）

一顕現せよ、（I C R）

一我が身を喰らいて力と為せ（M M B G P）

『魔女狩りの王』！
イノケンティウス

ボン！と。

目の前の虚空で突然爆発が起こり、そこから炎の巨神が現れた。

『イノケンティウス
魔女狩りの王』

それは、『必ず殺す』。

「ちよつ、危険すぎるでしょーがッ！」

「オメエにやこうじゃなきや勝てねえって判断だよ！」

『イノケンティウス
魔女狩りの王』が腕を振りかぶり、零夏に向かって振り下ろす。
それだけでも、炎の塊が落ちて来るモノだから脅威には変わりのない。

咄嗟に地面を転がりながら避け、念のために更に距離を開ける。

「ダブル！」

ボン！と、更に『イノケンティウス
魔女狩りの王』が増える。

「更に…、トリプル！」

そして、もう一体。

「……完全に手合わせじゃないね、コレ。寧ろもう殺し合いの域に達するよ……」

アハハハ、と乾いた笑みを浮かべる零夏。
もう、腹を括るしかなさそうだ。

「……いいよ！最後まで、付き合ってあげる！」

両腕を広げる。すると、その先に黒い球体が現れ、甲高い音と共に回転する円盤に変わった。

「さあ、」

「死合いを、」

「「始めようか！」」

結局、どちらも疲れて立てなくなるまで死合い（試合）は続き、時間を確認しとところいよいよ午後9時になるところであった。

「ヤバイ！」

零夏表情が驚愕に染まる。

彼、はやての家に居候の身である、はやては零夏のことをかなり心配していたりするのだ。

今帰れば、はやての O H A N A S I が待っているに違いな

い。これは、確定事項だ。

「あ？ お前、今はやてのトコにいんのか？」

「あ、うん。ヴォルケンリッター達はまだいないけどね」

「つーことは…、本格的に動くのはもつと先ってことか」

「そうなるね。まあでも無印でも結構関わるつもりだよ？　なんかあつた時の保険の為にさ」

「そりゃ有難い。取り敢えず、リインフォース方の救出方法は考えてあるんだ。ただ、まだ完成してない」

「もしかして、まだデバイスを持つて無いとか？」

「ああ。後でユニゾンデバイスくれるつつわれてな。大人しく待つてることにした。それに、お前の力も必要だ。その『テレパス』が」

「成程。プランは抜かりないって訳だ」

「ただ、成功率は非常に低い。元々の改変されていない『夜天の魔導書』のプログラムがないからな。その場で対応していかないと」

「過去に飛べれば良いのにね……」

「ああ。後は時空を貫通する能力さえあれば行ける。完成はちよいと先だが、年末までには出来上がる筈だ」

「凄い計画力だね。素直に称賛するよ」

「あれはスゲエぞ。現段階では時間遡航は不可能だが、宇宙旅行なら朝飯前だぜ」

・ ・ ・ ・ ・

・
・
……と、この先のことを話していたらあっという間に9時30分を過ぎていた。

「じゃ、また」

「おう。いつでも来な。ベツレヘムの星の座標はずっとここだからな。別に飛んで来たって構わないがな？」

「あはは…、疲れるから遠慮しとくよ…」

フツ、と零夏の姿が虚空に消える。転移魔法を使っただの。

「さて。明日の準備でもするか」

忙しくなるぞー、と自らを鼓舞し、神威は歩きだした――。

第4話 団樂のまにまに

神威 side

さて、三連休の初日の朝となった。

昨日のうちにベツレヘムの星内に住居を作っておき、そこに荷物
とかも全て揃えた。

今は高町家の前にいる。

これから月村邸に一旦集合し、それから行くんだとき。

アリサやすずかとはもう自己紹介は済ませてある。

あの月村邸でのジュエルシードの騒ぎの時。たまたま近くを通り
かかって一緒にフェレットを捜した、というわかりやすいウソをつ
いたのだ。

「おはようございます」

玄関から出て来た五人に挨拶。高町一家からも返事が返ってきた。

「カムイ君、おはようなの！」

「おう」

『（ユーノも、おはような）』

『（うん、おはよう）』

六人で車に乗り込む。少々狭いが致し方ないことだ。我慢我慢。

さて。

この温泉イベント。旅行先の海鳴温泉にて夜中、フェイトとの接触が起こる。

俺は静観をするつもりだ。介入してまで原作をブレイクするつつうのめ気が引ける。ここでフェイトに勝っちまったら、後々の展開が予想付かなくなっちまう。

……………ヤバい。そっぴゃアリシアやプレシアの対策取ってねえ。取り敢えずこれは完璧に原作介入してブレイクする予定だ。…いや、予定つつうよりブレイクしておきたいって言っという方が正しいか。実際合切何一つとして準備してねえんだし。

……………あ、良いこと思いついた。

よし、帰ったら準備だ。それからでも間に合う……………筈。何かちょっと自信無い……………。

あんなの詠唱すなんてなったらきつと労力使っただろうなあ…。無印終了まで殆ど動けなくなるな…。多分、魔術は使用不可能。この世界の魔法なら何とか使える筈だ。

……………と、なると。

デバイスが必要だ。

後にユニゾンデバイスが届く予定だが、神上曰く、無印が終わった送るだそうだ。この前だったかに言われた。

とにかく、普通のも何もいいからデバイスが欲しい。
早く来ないかなあ。クロノとかクロノとかクロノとか……。言っ
て脅して一つ拝借しよう。無理なら『NANOHA式』のOHA
NA SIでなんとかするか……。

「へっくち！」

と、急になのが可愛らしくくしゃみをした。

「…誰かなのは噂でもしてたのかな……？」

………スマン。それ多分俺だ……。

| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

海鳴温泉に到着。

自然に囲まれた良い所だ。また今度来てみるのも良いかもしれな
い。

ふむ。まあ今夜まではゆっくり休むとしよう。昨日の疲れもまだ

回復し切ってないし。流石に戦闘二回はキツかったか……。まだ慣れてないし、魔力の消費も激しかったしな。特に二回目が。

「（ユーノ。風呂行くか？）」

「（うん。そうさせてもらうよ。流石にアッチはイロイロと問題が

……）」

「（お前、男だもんな）」

「（うん……、って待って！）」

「（何だ？ 問題はあるけど女子達と入りたいのか？ この淫獣め
！）」

「（違うからね！？ それより何で僕が男だって知ってるのさ！？）」

」

「（わかつちゃったんだからしょうがない）」

まあ原作知ってるからな。

「（答えになってない！ 再度返答を求めろ！）」

「（だが断る！）」

と、俺とユーノは漫才をしながら温泉に浸かった。

S i d e o u t

さわさわと柔らかいそよ風が林を駆け抜け頬を優しく撫でる。白銀の髪が揺れ、それは正に風を表すようだった。

『It's good wind』

「ん。確かに、透き通ってる」

大きく息を吸い込み、肺いっぱいに新鮮なマイナスイオンを蓄える。

「本当、そうだね」

木の枝に座る金髪の少女も、白銀の髪の少年に同意の意を示した。

彼ら二人——トキとフェイトは海鳴温泉の近くに来ていた。理由は単純明快。近くに反応があるジュエルシードの為だ。

「発動はまだ先になると思われる。今はゆっくり待とう」

『I think, too』

「そうだね。そうしよっか、バルディッシュ」

『Yes . Sir』

少し肩の力を抜き、ふうと息を吐く。体内の無駄な力が出ていくように、気持ち良かった。

「……あの白い娘とは別の、もう一人の魔導師……」

「ああ。ボウガンみたいなのと棍メイを構えた奴か」

「うん。あの人、スゴく強いよね」

「同意。身体能力の強化は魔法じゃなかった。ボウガンからも、魔力は感じたけどこれも魔法は使われてなかった」

「確か……、『聖人』がどうのこうの言ってたよね」

コクリ、とトキが首を縦に振った。それを見てフェイトが不安そうな表情を浮かべる。

「大丈夫、かな……。あの人に止められたら、反撃出来ないよ……」

フェイトの顔に影が差す。それを見たトキは、フツと笑い飛ばした。

「心配しなくて良い。奴は俺が止める。フェイトは気にしないでジユエルシードと白い魔導師に集中してれば良いんだから」
「でも……、もしトキが怪我したら……」

『You're over protection, Fate』
『Sympathize』

「ほら、ピアスもバルも過保護だってよ」
「う……、バルディッシュまで……」

相棒であるバルディッシュにまで『過保護過ぎる』と言われ、フ

エイトは赤くなつて俯いた。それを見てトキは苦笑する。（因みに『バル』とはバルディッシュのことだ）

「（あー、もしもし？ こちらアルフ）」

「（トキだ。聞こえてるぞ）」

「（私も）」

「（うん。それでねえ、見てきたよ、あの白い娘。フェイトの敵じゃないよ）」

「（そりやそうだろ。動きが明らかにド素人だ）」

「（そうなんだけどねえ……。それより、あの異色の目の子。あれはヤバいね）」

「（私達も、今その話をしていたところ）」

「（あの子には、私は疎かフェイトにも無理だと思う）」

「（同意見だ。何かあったか？）」

「（んー……。なんだろうねえ。なんか、魔導師つて雰囲気じゃなかったよ）」

「（……………）」

「（？ どうしたの、トキ？ 急に黙り込んで）」

「（らしくないねえ。こういう時は一番よく喋るつてのに）」

「（ああ…。アイツ、全く本気じゃなかった。それに、攻撃を無効にする特殊な“何か”も出来る。また接触した時どう対応しようかと思つてな）」

ハア、と息を吐き、枝の間から天を見上げた。

嫌なくらい、青かつた――。

| | | | | | | | | |

零夏 Side

「暇だねー」(ズズズ…)

「そやねー」(ズズズ…)

——コト…。

「……はふう……」

温かいお茶を啜り二人してぐてーとテーブルに突っ伏す。

今日はなのは達の温泉イベントらしい(昨日神威から聞いた)が、
僕らは如何せんやることなくて暇だった。

あ、でもイベントには途中参加するよ？ 神威曰くもう一人のイレギュラーさんはフェイトに付いてるらしくってね。今夜抜け出して行くつもりなんだ。

はやてなら幻影みたいなのを創り出しておけば世話とかしてくれるからダイジョブ。

まあそれまで時間を潰す訳だけど……。

「やることが無いねー」

「そやねー」

「どうしようかねー」

「そやねー」

はやてもさつきから「そやねー」しか言ってくれない。重症だなコリヤ。

何故か今日は図書館も臨時休館。雨漏りがどうのこうの言ってた。全く、管理ぐらいしっかりしてほしいね。よりによってこんな暇な日に休館とか……。この怒りは神に^{リーシャ}ぶつけよう、うん、そうしよう。それが一番良い。

『良くなー——————い！』

……………ん？ 今なんか電波をキャッチしたような……。気の所為か。

「レイく〜ん」

「なーにー？」

「一発芸やつて〜」

「無理〜。とゆーか何故にそこで一発芸をチョイスイング？」
「なんとなく〜」

そう言っと思ってました。

「とにかく無理〜。そもそも持ちネタが無い」

「そかー。でもそこを何とか「だが断る！」え〜」

「無い物強請^{ねだ}りしたって意味無いんだから。散歩にでも行こっか」

「ん〜ッ、良い天気やな〜」

「全く以て同感だよ」

比較的近い位置にある海鳴公園へとやってきた。高台にあるここは広い海鳴市を一望出来る良い場所だったりする。

そう言えばなのはもここで訓練してたっけ？

「いつ来ても良い眺めやな。ね、レイ君」

こっちを向いて笑顔を作るはやてに僕も頷いて彼女の隣に立ち同じ景色を見た。

こんな娘が命の危機に晒されている。
そう考えると胸が痛い。

結局、はやての足の痺れも『闇の書』が関係してるからこうなっている。

『闇の書』なんて無ければ良かったのに。

でも、一『闇の書』（ソレ）が無ければ今のはやてはこころにはいないことになってしまうんだ。

力を持たない、普通の女の子に。

でも、否定は出来ない。

はやてに元々魔導師になる力があつたのなら、もしかしたら管理局員になっていたのかもしれない。そこでもきつと活躍したんじゃないだろうか。そのまっすぐな心を持って。

……一体何を考えてるんだ僕は。

結局これも、自分で言つた『無い物強請り』じゃないか……。情けない。

はやては相変わらず少し潮の香る風を受けながら笑顔で景色を眺めていた。

……すごく、嬉しそうだ。

家族みたいな人が出来た嬉しさなのか。
それとも、純粹に出歩けて嬉しいのか。

僕にはわからない。

でもきつと、はやては嬉しいんだ。

何が？　なんて訊きはしない。はやてが嬉しいならば、それで良い。

「レイ君」

「？　どうしたの？」

左手が、暖かい。

はやての手だ。はやての手が僕の手を握っていた。

「何か少し、寂しそうな顔をしててな」

「そう？　至って普通だけど」

嘘だ。ただの、痩せ我慢だ。

「ううん、違う。ウチにはわかる。スゴく、小さく見える」

正解。

でも、そんなことは口に出来ない。

今はまだ、僕がモノを言う資格や権利なんて無いんだ。

「大丈夫や。ウチがいる。いつでも相談に乗ったげる。それが、家族や」

ギュツ、と強く握り締められた。それは、どこかへ行ってしまうのを拒むように、繋ぎ止めるように強いものだった。

「……ま、それは僕が言わなきゃいけない台詞でもあるんだけどね」

今度はそつと、僕が握り返す。

ここにいますよ。

一緒にいてあげるよ、と。

「お互い様やね」

さて、夜になった。

俺は早々と部屋を抜け出してすっかり暗くなった林の中を歩いていた。

まだジュエルシードの発動反応は無い。が、魔導師らしき魔力反応は三つ確認出来た。それに加え、もう一つの反応がこちらに急速的に近づいてきている。九分九厘、というより絶対零夏だ。

「——優先する。人肌を上位に、魔法を下位に」

これからもしあの銀髪と当たるとなれば、これは必須だ。謂わば、保険。

魔法はこれで俺には効かないし、格闘技で来たならばゼロにすれば良い。

ただ、気を付けなければいけないのが、不意討ちだ。『攻撃』という概念を認識しなきゃ、詠唱も間に合わない。況してや、『聖人』の身体能力に付いて来る程の手練だ。

それに実は、あの優先順位を変える魔術がどれくらい続くのかわかっていない。永続的に続く訳ではないが、それなりに長くは使える筈だ。タイミングを見て再詠唱も必要だろう。

「カムイ君！」

と、歩みを進めていると後ろからなのはが走って来ていた。コイツが気付くってことは、もうジュエルシードは発動したって訳だ。

「存外遅かったな」

「し、仕方がないの！ 浴衣から着替えたり部屋抜け出したりとかス

「ごく大変だったの！」

「へーへー。言い訳は後で感想文200文字以上で受け付けてやる」
「ひ、酷いの……」

原作を知ってる俺に抜かりなど無い訳だ。

俺らはジュエルシードが発動した場所へと駆けた。

発動場所に来てみると、封印を終えたフェイト、アルフ、銀髪。
そして、いつの間にか零夏がいた。

「お前も来たのか」

「まあね。またいつ来れるかわからないから、顔合わせでも、ね」

零夏は無手のまま構えていないように見えるが、脚にはきちんと
力を込めていつでも動けるようにしている。

「わらわらと……、アンタら一体何なんだい？」

殺気を込めてアルフが威嚇する。まあ邪魔されりや怒るわな。

「何、ちよいとジュエルシードに関係しなきゃいけない人でね」

「悪く思わないでね、って言っても無理だよねえ」

そう言って零夏が左手を振りかぶる。

刹那、

「ピース！」

『All right, my master』

銀髪がランスを展開すると同時に腕が振り下ろされ、オレンジ色の尻尾のようなものがランスに激突した。

「ちよつと実力を見せてよ。君がどれくらいイレギュラーなのかを」

右腕を振り上げる。すると、今度はオレンジの巨大な翼が右腕に現れた。それを思い切り振るい突風を巻き起こす。

「ツッ！」

銀髪が踏ん張るが、ランスを尻尾に絡め取られて零夏に引き寄せられた。

完全に体勢は崩れた。

——かと思われた。

「貫け、」

銀髪が左手の指を零夏の方に向けていた。その指先は微かに光り、

魔力の収束がされていた。

「銀閃」

音は無い。

その細い白銀の閃光は、一瞬で零夏を貫いていた。

「惜しいね」

そう、確かに貫いてはいた。零夏の“幻”を。

体を反転させ、真後ろを凪いだ。

「うおッ!？」

まさか来るとは思ってなかったんだろう。

咄嗟にしゃがんで一撃をやり過ぎ、距離を取った。

「オイオイ零夏ア。きちつと決めろよ」

いや、無理、無理だから、と首を振る零夏。

恐らくだが、あの銀髪は直感や瞬発力に長けてるんだろう。

俺だったらあの『鏡花水月』は受けに回っちまった。それに比べ、銀髪は次零夏が来る所を的確に捕えていやがった。

判断材料は充分だ。

『The situation is very disadvantage (状況は極めて不利ですね)』

「わかっている」

銀髪のインテリジェントデバイスがわかりやすい感想を述べる。

単純に考えればこちらはイレギュラーが二人。戦力差は確実にこっちが上だ。

「だから、」

ガツ、と。銀髪がランスを地面に突き刺した。

「纏めて吹き飛ばす」

甲高い音を立ててランスを中心に魔方陣が展開され、更にランスが地面を削りながら回転しだした。

「フェイト」

銀髪がフェイトを抱き寄せて自分のローブで包ませる。フェイトがかなり驚いていたが、ツツコミはナシだ。

何故か？ シリアスな場面だからだ。

「何をするつもりだ？」

銀髪に問い掛ける。

返って来た答えは、

「広域破壊魔法」

理解するには充分過ぎる解答だった。

「いや、その……」

初めての温もりが、すごく気持ち良くて安心した。
事実そうなのだが、そんなことを口に出来る訳がなく、口籠もつ
たまま固まる。

それを見て、仕方ない、とトキがフェイトを立たせた。

「カッ！ イチャイチャしてらア」

「「！！」」

ふと、暗闇から低い声が響く。

その声の主、神威たる人物は平然と立っていた。

左手には、巨大な棍^{メイヌ}。

保険が役に立った訳だ。

理由は簡単。

魔法の風の刃は神威には効果ナシ。後の脅威は消去法から物体的
な物のみへと絞られる。

それならば、自身に当たる前に無効化すれば何等問題無いのだ。

「なあ零夏、お前もそう思わねえか？」

「全く以て同感だね」

神威の後ろからも、余裕を保った声が聞こえて来た。

零夏だ。

その隣にはなのはとユーノもいる。
その三人は障壁に囲まれていた。

「やり過ぎた感があったが……、どうやらそうでもないみたいだな」

トキは悔やむ様子もなく、逆に苦笑した。

「なのは。金髪魔導師とやってこい。ユーノは補佐。俺は零夏と組んで銀髪を抑える——！！」

言い終わると同時にトキへと距離を詰め、棍で以て斬り上げてワザと空中へと誘導。神威と零夏が追い掛けるように飛び上がり、激しい空中戦が始まる。

神威は棍を聖剣アスカロンに切り替えて斧の刃を振るう。
零夏はその手に氷の薙刀を具現化。

トキは劣勢にも関わらず、不敵な笑みを浮かべて二人を迎え撃つ。

氷の薙刀を振るう。氷のつぶてが多数現れてトキへと向かう。
対するトキはローブを大きく翻してガードした。

「硬いやツだね、それ！」

「だがな！」

トキの真後ろにアスカロンを振り上げた神威が現れる。

トキは振り返らない。

思い切りアスカロンを振り下ろそうとした。

「——うガッ!？」

が、神威の腹にトキの蹴りで放たれた左脚が食い込み、それは振るわれることなく飛ばされた。

続け様に右手のピアス・ラースの突きを正面の零夏へと繰り出す。バキン! と呆気なく氷の薙刀は折れ、零夏も大きく後退した。

「——灰は灰に——塵は塵に——」

トキの後ろで、神威が詠唱。両の手に紅と碧の炎が灯り、肥大化する。

「——紅十字の吸血殺し!！」

轟! ! と。

紅と碧の炎の長剣が十字を描いてトキを斬り裂く。それを宙返りをして躲し、神威の真後ろへと躍り出た。

無防備な背に突きを出す。が神威が跳んで躲す。

そして、丁度直線上。神威がいなくなったことで、その先に零夏が^がありのがよく見えた。

「ツツ!？」

その彼の手には、舞い踊る^{もえさかる}炎。

「行け!」

トキの視界いっぱいに見つ赤な炎の濁流が迫る。

刹那、トキを赤が飲み込んだ――。

神威 Side

まさか後ろ向きで蹴りまでは予想してなかった。ここは流石と賞賛しておこう。

ついさっき、零夏の火炎――いや、爆炎放射が銀髪を飲み込んだ。まあ死んではいいだろうけど、それなりにダメージはある筈だ。今も炎が通過した軌道は轟轟と燃えている。

……………ちょっと心配になった。

「……………あっちも終わったみたいだね」

視線の先では金髪魔導師がなのはの首筋にデバイスを突き付けたところだった。

まあここまでは原作通――ッ!?

「避ける！」

咄嗟に二人で動き出す。

刹那、俺らがさつきまでいた場所を白銀の閃光が貫いた。

轟…、と。炎が払われる。

そこから出てきたのは、バリアジャケットのローブが微かに焦げた銀髪^{ヤツ}だった。

「…んだよありゃあ……ほぼノーダメージじゃんか……」

アスカロンを担ぎ、いつでも動きだせるように構えた。隣に来た零夏も同様にだ。

が、銀髪^{ヤツ}はこちらを一瞥しただけで、攻撃するような動きは見せなかった。

「自己紹介でもしようか。僕は琴芝零夏。こっちは紅波神威」

「……トキ・ロートリアスだ」

へえ、トキ、ね……。

「こっちはもう争う気は無いよ。向こうも決着付いたみたいだし、何よりこちらの様子見だったからね。……フェイト・テストロッサ、彼女を頼むよ？」

ブウン、と零夏のカタチがブレ、次の瞬間には消えていた。大方
テレポーション
“瞬間移動能力”だろう。

「ッ、何故その名を……！？ ……いや、別に知っててもおかしくはないか……」

銀髪^{トキ}は驚愕の表情を浮かべていたが、すぐに冷静な表情へと切り替え、フェイトの方へと飛んだ。

………今のトキ^{ヤツ}の反応。少し違和感がありすぎやしないか……？

神上は、「トキ^{かれ}は取り敢えず『物語』という媒体に埋め込まれたイレギュラー』という設定になっています（笑）」と言っていた。（笑）とかはどうか知らんが。

さっきのことは、恐らくフェイトが名を名乗っていないのにこちらが名を知っていたということに一瞬驚いていたんだろう。だが、その後の言葉があきらかにおかしかった。

『……いや、別に知っててもおかしくはないか……』

問題は、何故おかしくないと断定出来たのか。

トキ^{ヤツ}には俺らが転生者であるとは言っていない。と、言うことは、俺らがフェイトの名を知っているのは知らない筈なのだ。

では、一体何故……？

（・・・）

無理
:
:
:
or
 z_0 .

していることはある筈だ。

……まあそれは騒ぎが静まったら……、そうだな、一般的に言う『空白期』にでも訊こうか。

その後、原作通りにフェイト達は帰った。

俺もなのはと共に旅館へと戻

大変だ。

「カムイ君!? カムイ君、しっかりするの! 気を確かに!」
「ハッ、…。スマン、脳内で三点リーダーがゲシュタルト崩壊を起こした」

「げ、げしゅとる?」

「……まあ良い」

「うわーん！ 無視しないでほしいのー！」

いや今そんな漫才やってる場合じゃないから。マジで。本気と真剣と書いてマジだ。

「……ココ。完全に怪しまれるだろ」

周りを見れば、『平野と石と時々おとん……じゃなくて木』状態。酷い云々じゃなくて完全にアウトで非常にアレだ。

『アレ』はアニメの第一話を見てね♪byキョン

「なのは、直せ」

「ふえええええーッ!? む、無理だよおー!」

「負けてジュエルシード持ってた罰だ。序でに今度から俺が直々に特訓してやるから覚悟しろ」

「うにゃああああーッッ!」

第5話 学校だよ。全く、勉強とかホント嫌んなるぜ……byカマイ

神威Side

休みも開け、再び平日が訪れる。

サラリーマンはスーツを着て着々と家を出、学生は友達と肩を並べて各学校へと登校する。

今日はそんな日常(?)の一部始終を見ていただこう。

学校だよ。全く、勉強とかホント嫌んなるぜ……byカマイ

朝が来た。

別にラジオ体操とかする訳でもない。

普通に起きて普通に顔を洗い普通に朝食を食う。

転生者つつつても普通の人間(?)なんだ。普通だって良いじゃないか。

今回の話だって『普通』をテーマにしてるんだし。

さて、話が逸れたな。

今日は週明けの火曜日。俺はベツレヘムの星の中にある住居を使
つていて、今はそこでのんびりニート生活ライフを満喫している。ニート
つてのは楽だ。働かなくて良いし、しかも金は神上が上限ナシにく
れた。

……これで一体何をしろと……？

ダメ人間の道まっしぐらだ。

さて。

そんな下らない道を颯爽と駆ける俺な訳だが、また厄介な時期に
突入している。

アレだ。簡潔に言えばなのはとアリサのケンカだ。

どことなく俺はアリサ過剰じゃね？　って思ったけどまあ良いか
と思う。ツンデレだし。

……とある小学校区。

「へっくち！」

「アリサちゃん、大丈夫……？」

「大丈夫よ。……ったく、誰かアタシの噂でもしてんの？」

正解。

……まあ今頃くしゃみでもしてんだろう。

ベツレヘムの星から降りて地球へと向かう。

大気圏外は相変わらず暗いが、その辺りはベツレヘムの星内部だけ例外になっている。まあつまりは明るくなってるってこと。

時間的には日本の標準時間に合わせてある。

そして、冒頭の通り今は朝だ。

今日はなのはの魔法特訓ということで海鳴公園集合になっている。俺は転移してあつという間に到着。

なのはは魔力反応のある距離からして後少しで到着だろう。

「おはよー！」

数分後、パタパタと大きく手を振りながらなのはが駆けてくる。

俺も軽く片手を上げた。

「調子は？」

「絶好調なの！ 準備OK！」

ならばよし、と左手を真横に振る。と、そこにルーンのタロットが現れる。

後は適当にこれを配置して……、準備完了。

「カムイ君、あれは何？」

「ん？ ああ、これな。これは人払い（Opila）だ。ここ一帯の人に『何故かここは近づこうとは思わない』ように集中を逸らしてるだけだ。結界とか疲れるし、それに今回派手なのはやんないか

らな」

「……えーと、その……、今回はってことは…いつか派手なのをするってことなのかな……？」

「ん？ そんなの、当たり前だろ？」

「……………！！」（↑ショック）

擬音で「ガガン！Σ（□、；）！！」と聞こえそうなくらいの衝撃を受けたことが大いにわかる反応をされた。

意外と傷付くよ、コレ。

「……まあ良い。今回は軽く近接戦の練習をする。お前は砲撃魔法とかが得意だろうが、近接の間に合入られたらあの時みたいな過ちを繰り返すだけだ。その為、今回は弱点克服の為に近接戦をレクチャーしてやる」

そう言っただけから取り出したのは……、

「……小麦粉？」

そう、小麦粉である。

最近では値上がりしてきている為少し買っただけを躊躇ってしまう物だ。

それを約1kg程取り出した。

「いやなに、俺はデバイスとか物理的に武器に出来るようなのが、あるっちゃあるがお前にとっちゃ危険過ぎるからな。だからこれで代用する」

「え、でも……どうやって？」

「ここで簡単に武器に変えてしまるのがオレクオリティ。まあ見てな」

ボン！ と小麦粉の入っていた袋を破る。白い小麦粉が充満した。

「さて。じゃ、始めるぞ。セットアップしろ」

充満していた小麦粉がひとりでに動き出し、俺の右手の掌に集まる。

カタチはギロチン。小麦粉とは言っても密度はあるし固い。だから、

「——優先する。人肌を上位に、小麦粉を下位に」

これで、小麦粉は人肌を傷付けることはなくなる。

なのはもレイジングハートをセットアップし終えて準備完了。

まずはレベル1。

「最初は基本の動きだ。まあお前の場合は空中戦になるだろうから、陸戦は省くぞ。基本、空中戦になると足場はない訳だから、地面を蹴る行程が無い。これはつまり魔法、お前のレイジングハートで言う Fryer Fin のみでの瞬発力が必要になるんだ。だから、お前には空中でとにかく動き回ってもらう。動きはこちらであらかじめ指定するからそれに合わせろよ」

「はいなの！」

ガッツポーズをして意気込みを入れる。魔法の訓練が楽しいのだろうか？

あの時、フェイトとは充分な話が出来なかった。それで強くなり

たいと思っ たんだろう。

なら、

俺はそれに付き合うだけだ。

「簡単な動きからだ。酔ったりしたらいつでも言いな」

こうして、魔法訓練初日が幕を開けた……。

メニュー

- 1 サイドステップ
- 2 ゴーバック
- 3 リフトダウン
- 4 ロール（上下前後左右）
- 5 組合せ応用
- 6 実践

備考、所要期間は3日。1日で2種を覚え、次日に復習。

5、の動きもこちらが指定。6は段々とペース配分を上げる。

紅波神威

「サイドステップ。簡単なイメージは反復横とびだ。ただし、細かくステップを踏む必要は全く無い。無駄なステップを踏んでる間にやられるからな。切り返しは、行く方向とは逆足の1で切り返すこと。そっちの方が後で更に逆に行く時に楽だからな。まずは普通に左右に移動して見る」

まずは地上で見本を見せる。

右横に向かって走り、切り返しの時は右足の1で止まった瞬間、左に切り返す。

今度は逆に左へ走って左足の1でとまり、右足を反対方向に出す。今のが地上。

次は空中でだ。

この場合、体重を支える地面がない為、踏ん張りはそこまでできない。

どれだけ早く全身の体重移動が出来るかでこの切り返しは決まるんだ。

2往復ぐらいして一旦止めて降りる。

「とまあこんなモンだ。空中では地上みたいな踏ん張りが利かないから、逆足の1で止まりつつ全身の体重移動迅速に逆へと移せ。まずはカタチからだ」

・ ・ ・ ・ ・

約30分間で1、2のメニューを終了。今日はここまでにして、なのはを休ませる。

流石に30分の間動き回るのはキツイだろう。動き過ぎは体に悪い。その分見返りがあるってのが複雑なところだ。

ふにやふにやとベンチに座り込むのは。ジャケットを解除し、背もたれに背中を預けて盛大な溜息をした。

『She's tired（お疲れのようですね）』

「だろうな。俺でも軽く息が上がるんだ。運動が苦手なんつう奴には拷問だろうさ」

レイジングハートが飛んでくる。

こいつもこいつで主をサポートしてる。

やはり、なのはがここまでしても弱音を吐かないのはフェイトと圧倒的な差を感じたからだろう。

これじゃ話は到底出来ない。

そう感じたからこそ、もっと強くなって対等に話せるようになる。

きっとそんな思いがなのはを強くさせているんだろう。

……………多分。

え？ 適当？ 仕方ないじゃん。わからねえんだし。

んな厨二なことなんか言ってるねえんだよパトラッシュ……。

「じゃ、俺は帰るわな。お前は学校遅れんなよ？」

「あ、そうだった！ 今日は転校生が来る筈なの！」

「転校生？」

「そうなの！」

おかしいな。この頃原作には何の変化も無い筈だぞ？

零夏はまだヴォルケンリッター達がいらないからはやての傍は離れられない。それに、もうイレギュラーはいない。また追加されたなら神上辺りが連絡する筈だ。

じゃあ、誰？

「……まあいいや。取り敢えず、急げよ。転校生に間抜けなトコ見られちゃ如何だろうからな」

「はい！　じゃ、またね！」

「おうよ」

ぱたぱたと走り去るのはを見送り、俺はルーンの刻まれたタロットを回収してベツレヘムの星へと帰還した。

「おはようございます。それと、お帰りなさい」

ずてつ。

マイハウスを開けた瞬間、中にいた人を見てずっこけた。

「つーか何でアンタがいる訳ですかコノヤロー！」

何故か中で神上がのんびり紅茶を飲んでいた。

クソッ、忌々しい……。

「いえ。単なる報告とプレゼントです。しょうもないことですが、一応、ね」

にっこりと笑う。

作り笑顔なんだろう。所謂営業スマイルつつやっだ。
明らかに怪しい。

「報告は良いことと悪いことが一つずつ。プレゼントは一個用意してあります。良いニュースと悪いニュース、どちらを先にお聞きになりますか？」

「良い方から頼む」

「はい。まずは、歴史についてです」

「歴史？」

「ええ。少し長くはなりますが、聞いて下さい。」

かつて、我々が存在する世界は一つ。そして組織も一つでした。

正確には、私が神上になる二つ前の代。『世界』そのものが出来る前です。

ある時、混沌を司る神・カオスが反乱を起こしました。動機は極めて理不尽。しかし、神々はカオスの力をよく知っていたからこそ、恐れました。神は皆力を集め、カオスを止めます。それはもう酷い戦いでしたよ。我々は第零次神界大戦と呼んでいます。

創り途中であつた全ての世界がパワーバランスを崩して消滅。次元が歪み、あの虚数空間はそこのおこぼれ。あれよりずっと強力で長居すれば存在すら消えてしまうものまで出来ました。

第零次神界大戦。通称『God Wars』は我々神軍の勝利。混沌軍は取りあえず全滅しました。しかし、その時の戦争により、神の最高神たる神上を失いました。

全ての権限は候補だったナンバー2に移され、世界を再構築。そうして、いくつもの世界が出来、安定しました。神界にも平和で落

ち着いた時が戻り、元神上は私に全てを託しました。

そして、それが今。

しかし、また新たな火種……いえ、再び、今度は新しい力を持ったモノが出来上がりました。

『邪神』

我々とは全く逆の力を持つ、混沌軍のバラバラになった欠片の結晶体。それが、我々が敵なのです。勿論、我々は混沌軍の欠片という訳で迅速に調査を進めました。直接接触した者もいました。が、その接触した者全員、消えました。そうしてわかったことは、『邪神』は神上と同等の力を持ち、混沌軍より厄介だということ。

我々は天使界にも協力を仰ぎ、『邪神』の絶滅に臨みました。神達は各地に転生者を派遣。神に対抗する為の力を与え、今まででは累計何千億、兆、京……無限以上。神界大戦であつたならば、混沌軍にも余裕とまでは行きませんが勝つことが充分に出来る戦力です。

しかし、それでも『邪神』は侵出を止めませんでした。

世界を次々と掌握、破壊し、我が物へと変えて自らの力にしました。

なんとか食い止めることが出来た世界もありましたが、良くて文明絶滅。一番酷くて銀河系数十個の破壊でした。あるところでは転生者も殺されてしまっています。

一時、ゼウスも一度だけ戦いを挑みましたが、消されかけました。なんとか助け出したものの、これでこちら側も内面的なダメージを負いました。ゼウスは誰もが知る全能の神。神上には遠い存在ですが、普通の者達にとっては憧れの存在という奴です。それが振り返りたちになったとなれば、士気の降下は必然。心が折れた者もいます。

混沌軍は真正面からのぶつかり合いでしたから数で有利なこちらが勝ちましたが、『邪神』はこちらの弱点を的確に突いてきましてね。苦戦苦戦の連続です。まあ今でも何とか持ちこたえてますが……。

こうして、現在に至る訳です」

恐らく、冷めたであろう紅茶を嫌な顔をせず、ちょっと眉を寄せたな。まあ紅茶を啜り、ティーカップを置いた。

「どうです？ 良い歴史の勉強になりましたでしょう？」

にっこりと笑う神上。

……っか、

「まっつつつたく嬉しくねえ悪いヤツじゃねエかあ！」

期待した俺がバカみたいじゃねえか！

「秘技（でもないけど）、床ごと卓袱台返しイッ！！」

まあつまりは床ごと地面をめくり上げる技だ。そこに何故卓袱台があつたかは割愛。

「つと、危ないですね」

神上は落ち着いたまま豪華そうな紅茶のティーセットをちゃっかり避難させつつ華麗に避けた。

ちくせう、当たらん。

「そうそれと、もう一つ。今度は悪いニュースです。約十年後、『邪神』は必ず現れます」

はい？

「これは絶対です。何にせよ、この世界を掌握出来るような兵器が出るんですから」

……見当はつく。

恐らく、ゆりかごだろう。

最後は艦隊の集中砲撃で消滅したが、『邪神』とやらなら何かに使いそうだ。

「ニュースは以上です。プレゼントはテーブルの上に置いておきましたので早く開けておいて下さい。私は帰りますので」

と、刹那に神上の足元が光出す。

「…ああ、そうそう。遅刻は恥ずかしいですよ？ では、失礼」

そして、消えた。

何だってんだ一体。

「あつ、そういえば」

プレゼントって何だ？

テーブルの上にあるってことは物体かなんかだよな。

箱を取り、蓋を取って中身を確認……って、え？

「制服？」

そう、中身は歴とした制服だった。

白い生地、黒のラインが特徴的なコレ。明らかになのは通う聖祥小学校の物だ。

……何故だろう。デジャヴ。

なのは「今日は転校生が来るの！」

おかしいな、イレギュラーはもういないぞ？
手には制服。

神上「遅刻は恥ずかしいですよ？」

時計を確認する。

時間は、8時29分。

俺の脳内で、全てが繋がった。

「転校生、俺かよ！？ しかも遅刻確定だああああッッ！！」

カチッ。

無情にも、絶対に誤差が無いよう設定した時計の針は、8時30分をいつも通りに、そして小さく残酷な音を立てて示したのだった。

………転校初日に遅刻とか……、どこの主人公だよ……。
トホホ……。

| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

なのはSide

こんにちは……、と言うよりはおはようございますかな？
聖祥小学校3年生、高町なのはです。

今日は転校生が来るといふことで、皆少しウキウキしています。

……だけど……、

「先生、中々来ないね」

「そうだね……。何か問題でもあったのかな……？」

そう、先生が来ないんです。

皆はウキウキと同時に少し暇そうにしています。

私もすずかちゃんやアリサちゃんとは話を待つことにしました。

「何でも、男子らしいわよ」

「へえ……。優しいのかなあ？」

「さあ？　ただウチの情報によれば男子だつてことしかわからなかつたけど……」

うーん……、とアリサちゃんが唸る。きつとまだ話せることがあると考えてる筈なの。

「あッ、思い出した！」

パンツ！
と手を叩いて明るい表情を作る。

「確かね、左右の瞳の色が違っただって！」

.....
魚？

「右目が蒼で左目は黒！ 短い黒髪よ！」

……………あれ？

その人、もしかして、私の知り合いなのでは…………？

「へえ」。綺麗そうな人だねえ」

…………絶対そうなの。あの人以上絶対いないの…………！

「すみません、遅くなりました」

ガラガラと扉を開けて先生が入ってきました。

「今日は転校生の方が来ています。では、入って来て下さい」

そうしたら、やっぱり予想通り。あの人——カムイ君だったの。

S i d e o u t

神威 S i d e

…………結局、慌てて準備したら余計に遅くなって遅刻した——と言っても遅刻確定であったワケだが…………。

「今日は転校生の方が来ています。では、入って来て下さい」

教師（名前はまだ知らない）に呼ばれて中へと入り込む。

でだ、

「（何でここにいんだよ!?）」

「（それはこっちの台詞なの!）」

何故かなのはがいた。

いやまあ確かに聖祥小学校なんだからいるのは当たり前なんだが
……、^{アイツ}神上無理矢理過ぎだろ！

「——では、高町さんの隣の席に行つて下さい」

都合良過ぎねえ!?

「（カムイ君、転校生だったの?）」

「（ああ。俺も今朝お前と別れた後に知った）」

「（え!?）」

「（親（神上）が間抜けでな。言つの忘れてたつてよ）」

「（……ドンマイなの……）」

嗚呼、そんな憐れみの瞳で見ないでくれ……、かなり傷つくから
……。

side out

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2343u/>

イレギュラーが行く！～リリカルなのは【MASVF】～

2011年11月11日12時32分発行